

## よくある言い回しに隠れた戦略的仮定法

—If I didn't know better, I'd think SV は SV と思っていない人が使う表現か—

平沢慎也

s-hirasawa@keio.jp

キーワード：仮定法 字義通りの意味 語用論 慣習性 頻度分布 プロトタイプカテゴリー

### 要旨

英語には If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV という慣習的な表現がある (e.g., *"I mean, she's just ... different."* **"If I didn't know better, I'd think you were in love."** 「いや、その、彼女はほら…特別っていうか」「あれあれ、まるで恋でもしてるみたいない口ぶりじゃないか」。この表現は、know better than to do ... の省略形を含み、かつ仮定法をとっているため、字義通りには「もしも私が、SV だと思ってしまう程度の経験的知識、常識、分別、理解しか (X に関して) 持っていなかったら、SV と思ってしまう [言ってしまう, etc.] ところだ (実際の私は SV ではないと判断できるだけの経験的知識、常識、分別、理解を (X に関して) 持っているため、SV とは思わない [言わない, etc.] が)」という意味を表す。しかし、実際に伝達される意味は「SV という驚くべきことが成り立っているように見える (聞こえる)、まるで SV みたいじゃないか」であり、話し手が SV と思っているのかわからないのが字義通りの意味と逆転する。本稿では、この言い回しにおける仮定法の使用は語用論的な戦略であると主張する。「実際の知識状態の話し手は SV とは思わないが、仮定の知識状態の話し手は SV と思いうる」ということは、SV と思いうる可能性が話し手以外の人々一般に開けているということである。これにより、SV だという思考の原因は話し手個人の何か (たとえば考え方の癖など) にあるのではなく、外界の側に—先の例では直前に聞き手が発した *"I mean, she's just ... different."* という言葉それ自体に—あるかように見せ、SV だという指摘・主張に少なくとも表面上の客観性・説得力を持たせることができる。本稿はさらに、コーパス調査により明らかになった If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の頻度分布から、この言い回しがプロトタイプカテゴリーをなしていることを指摘する。

### 1. はじめに<sup>1</sup>

英語には If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV という表現が存在する<sup>2</sup>。If 節の中に didn't [did not] という過去形が現れ、主節の方に 'd [would] という過去形の法助動詞が用いられていることから、この表現における法は直説法ではなく仮定法だと言える。仮定法では、多くの場合、解釈の大枠として

<sup>1</sup> 本稿の内容に関してコメントを下された Ash Spreadbury さん、石塚政行さん、氏家啓吾さん、奥脇健太さん、榎本智弘さん、田中太一さん、野中大輔さん、萩澤大輝さん、福田樹生さんに感謝申し上げます。

<sup>2</sup> 本稿では that 節内の主部と述部を S と V で表記する。



while you're urinating in men's room. **If I didn't know any better, I'd say** you're one of those stubborn people who are not open to suggestions.

(*The Big Bang Theory*, Season 5, Episode 16, The Vacation Solution)

シェルドン： これはこれはシーベルト学長ではないですか。オフィス前の投書箱に入れた意見のどれかにリアクションをいただけるのですね。

シーベルト： 違う。というか、そこら中に投書箱を設置するのやめろ。

シェルドン： 投書がお嫌い、と。お手洗いでおしっこをなさっている最中に意見を言われるのもお嫌い、と。これじゃあまるで、巷によくいる、「意見は受け付けません」的な頑固オヤジみたいですよ。

この2例を (2) と同様に考えようとする、次のような誤った解釈が導き出されることになる。

(6) (1) を (4) と (5) に当てはめた結果として出てくる誤った解釈

「もしも…ならば、私はSV と思う [言う] ところだ (実際には…ではないので、私はSV とは思わない [言わない] が)」

この解釈の問題は最後の「私はSV とは思わない [言わない] が」の部分にある。(6) に基づくと、(4) と (5) の話し手は実際にはSV だと指摘・主張していないことになる。しかし、詳しくは2節で論じるが、英語母語話者は、(4) と (5) の話し手 (Darrin と Sheldon) はそれぞれ「このパンは昨日の夕食に出そうとしていたものだ」「あなたもそこらへんの頑固オヤジと変わらない」と指摘・主張しているに等しいと解釈する。このことは、(4) と (5) を単純に (1) に基づいて解釈することはできないということを示している。

もちろん、この2例を見ただけでは、「この2例は仮定法がたまたま修辭的に用いられた特殊な例である」という可能性も否定できない。しかし、以下で見るように、筆者が出会った実例(2節)とコーパス調査によって得たデータ(3節)はIf I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV がよくある言い回し (conventional expression) としてのステータスを持っており、研究の対象として取り出す価値のある表現であることを明確に示している<sup>3</sup>。

本稿の構造は以下の通り。2節では、筆者がTVドラマや映画を見ている中で出会ったIf I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の実例について、正確な意味解釈を示す。3節では、この言い回しの(主に)形式面の頻度分布やバリエーションについて、コーパスデータをもとに論じる。4節は結語にあてる。

<sup>3</sup> 慣習表現を研究の対象として取り出すという行い一般が持つ意義については住吉・鈴木・西村(2019)を参照されたい。また、慣習表現の同定プロセスについての詳細な議論はWray(2009)を参照。

## 2. 実例の意味分析

### 2.1. 伝達される大意

2節では、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の実例の意味を丁寧に分析する。まず2.1節では、話者がこの言い回しで伝えようとしている文意は大まかには(7)のようにまとめられるという事実を実例に基づいて確認していく。

#### (7) If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の大意<sup>4</sup>

「SV という驚くべきことが成り立っているように見える (聞こえる), まるでSV みたいじゃないか」

この大意のポイントは、2つある。

- ① SV 部分が驚くべきこととして提示される
- ② (すでに1節で見たように) 仮定法の理屈に反して、結局SVだと指摘・主張しているに等しくなる

2.1節で確認していくのはこの①と②が実例においてどのように具現化しているかである。もちろん、一体どうしてIf I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV という形式がこのような大意を伝達することができるのかという問いも発生するが、この問いには2.2節で答える。

それでは1節のと(5)から始めよう。以下に状況説明を割愛のうえ再掲する。

- (8) Oh, breakfast is ready. Uh, any butter? If not, uh, don't, uh, bother. You know, **if I didn't know better, I'd think** this was last night's ... Uh, but, but that's a great way to economize, Sam.

(*Bewitched*, Season 4, Episode 19, Snob in the Grass)

うわあ、朝食ができてる。あの、バターってあったり…あ、なかったら、うん、いいんだ。えっと、このパンって、さては昨日の夜の…あ、いや、こ、こりゃあ賢い節約法だねえ、サム。

- (9) Sheldon: Ah, President Siebert. I assume you'd like to respond to one of the suggestions I put in the box by your office?

Siebert: No, and stop installing suggestion boxes everywhere.

Sheldon: You don't like written suggestions. You don't like when I give them to you while you're urinating in men's room. **If I didn't know any better, I'd say** you're one of those stubborn people who are not open to suggestions.

(*The Big Bang Theory*, Season 5, Episode 16, The Vacation Solution)

<sup>4</sup> ここで言う大まかな文意、大意については、脚注7を参照されたい。

- シェルドン： これはこれはシーベルト学長ではないですか。オフィス前の投書箱に入れた意見のどれかにリアクションをいただけるのですね。
- シーベルト： 違う。というか、そこら中に投書箱を設置するのやめろ。
- シェルドン： 投書がお嫌い、と。お手洗いでおしっこをなきっている最中に意見を言われるのもお嫌い、と。これじゃあまるで、巷によくいる、「意見は受け付けません」的な頑固オヤジみたいですよ。

(8) の話し手 Darrin は、「このパンは昨日の夜に出そうとしていたものだ」ということを驚くべきこととして提示している (ポイント①)。そして、眼前のパンの見た目から、その驚くべきことが成り立っているように見えると指摘している (ポイント②)。なお、SV 部分で *this is last night's ...* ではなく *this was last night's ...* と過去形が用いられているが、これは動詞の形が本来の動詞の形から一つ過去側にずれるという現象—バックシフト現象 (backshift) —が仮定法の影響により生じたものと考えられる<sup>5</sup>。仮定法の影響によるバックシフトは、少なくとも本稿で注目している言い回しにおいては義務的でない。実際、(9) では *you're one of those stubborn people* となっており、*you were one of those stubborn people* になっていない。その (9) の Sheldon は、*you're one of those stubborn people who are not open to suggestions* ということを驚くべきこととして提示している (ポイント①)。そして、Siebert 学長の発言を受けて、その驚くべきことが成り立っているように見える (聞こえる) と指摘している (ポイント②)。

以下、さらに例を追加していく。まずは映画『幸せになるための27のドレス』から。

(10) [状況説明] Kevin は新聞記者で、花嫁付添人を27回もやっている Jane についてコラムを書こうとしているが、完璧を求めて提出を数ヶ月遅らせている。上司の Maureen はやや呆れている。

Kevin: She's more than just this perpetual bridesmaid. You know, I don't know, there's ... there's ... there's a lot more to her than that.

Maureen: **If I didn't know you any better, I would say that you'd developed a little crush.** (映画 27 Dresses)

ケビン： ジェーンは単なる「永遠の花嫁付添人」じゃないと思うんすよね。なんかこう…なんだろ…もっとなんとすごいものを持つてる感じというか。

モーリーン： あらあら、まるで恋でも芽生えちゃってるような口ぶりね。

(10) の Maureen は、Kevin が取材対象の女性に恋をすることを驚くべきこととして提示している (ポイント①)。そして、Kevin の発言を受けて、その驚くべきことが成り立っているように

<sup>5</sup> 仮定法の影響によるバックシフト現象 (backshift) については Huddleston and Pullum (2002: 152) や千葉 (2013: 7-9) を参照。

見える（聞こえる）と指摘している（ポイント②）。仮定法の理屈からすると Maureen はその指摘をしなないことになるが、その解釈は端的に間違っている。なお、SV 部分で you (have) developed a little crush ではなく you'd developed a little crush と過去完了形が用いられているが、これもバックシフトの例である。

「まるで恋でもしているかのようだ」という趣旨のことを言っている点で (10) と似ているのが、次の『美女と野獣』（2017年の映画実写版）の例である。

- (11) [状況説明] 野獣のもとから抜け出してきた Belle と、野獣を殺しに行こうとしている Gaston のやりとりである。Belle の最初の発話の he は野獣を指す。Gaston の発話は周りにいる村人たちに向けてのものである。

Belle: Don't be afraid. He's gentle and kind.

Gaston: The monster has her under his spell. **If I didn't know better, I'd say** she even cared for him.

Belle: He's not a monster, Gaston. *You are.* (映画 *Beauty and the Beast*)

ベル： みんな、怖がらないで。彼は穏やかで、優しいの。

ガストン： ベルのやつ、化け物に魔法をかけられてる。まるで大事な人の話でもしてるかのような口ぶりだ。

ベル： 彼は化け物なんかじゃない。化け物はガストン、あんたの方よ。

Gaston は she even cared for him（バックシフトを解除すると she even cares for him）を驚くべきこととして提示している（ポイント①）。そして、Belle の発言を受けて、その驚くべきことが成り立っているように見える（聞こえる）と指摘している（ポイント②）。

次の3例はTVドラマの『フルハウス』から採ったものである。

- (12) [状況説明] Danny は親友の Joey が自分の妹と付き合おうとしているのを快く思っていない。

Danny: Joey, I wanted you two to be friends. I didn't want you to try and make a move on her.

Joey: You know, **if I didn't know you better, I'd swear** you didn't want me going out with your sister.

Danny: Look, it's just not a good idea, all right?

(*Full House*, Season 5, Episode 18, Too Much Monkey Business)

ダニー： ジョーイに妹と友だちになってほしいとは思っていたよ。だけど、妹に言い寄ってほしいなんて思っていない。

ジョーイ： おいおい、まるで妹と僕が付き合うのがイヤみたいな口ぶりじゃないか。

ダニー： 悪いことは言わないから、やめておけ。

- (13) [状況説明] もうすぐ出産を迎える Becky の夫 Jesse は、baby shower (赤ちゃんの誕生準備パーティー) が開かれるとは聞かされていない。その Jesse が、いかにも baby shower と分かるような装飾がなされた部屋に入ってくる。

Jesse: Boy, **if I didn't know better, I'd say** this was a baby shower.

Becky: It is a baby shower. (*Full House*, Season 5, Episode 8, Gotta Dance)

ジェシー: うわあ、まるで赤ちゃんの誕生準備パーティーみたいじゃないか。

ベッキー: まさに赤ちゃんの誕生準備パーティーよ。

- (14) [状況説明] 喧嘩をしている娘たち (Michelle を含む) を見て、父親の Danny が気分を害する場面。なお、Danny は家族同士がべたべたと仲良くしている状態が最善の状態だと思っており、日頃から家族間のハグなどを強要している。

Danny: You know, **if I didn't know any better, I'd say** this wasn't the happiest family on earth.

Michelle: Oh, please. (*Full House*, Season 5, Episode 21, Yours, Mine and Ours)

ダニー: おいおい、これじゃあまるで地球一幸せな家族じゃないみたいじゃないか。

ミシェル: 冗談やめてくださるー?

(12) の話し手 Joey は、you didn't want me going out with your sister (バックシフトを解除すると you don't want me going out with your sister) を驚くべきこととして提示しており (ポイント①)、Danny の発言からその驚くべきことが成り立っているように見える (聞こえる) と指摘している (ポイント②)。(13) では、baby shower のことを聞かされていなかった Jesse は、this was a baby shower (バックシフトを解除すると this is a baby shower) を驚くべきこととして提示している (ポイント①)。そして、部屋の装飾を見て、その驚くべきことが成り立っているように見えると指摘している (ポイント②)。なお、これに対して妻の Becky は “It is a baby shower” というように本来弱く読まれるはずの機能的要素である be 動詞に文強勢を置いて返答しているが、これは、直前の「X のようだ [かもしれない, etc.]」などの発言に対して X という方向性には同意しつつ「ようだ [かもしれない, etc.]」ではなく実際に X なのだ」と確からしさを訂正するイントネーションパターンの実現のされ方の一つである<sup>6</sup>。(14) は SV 部分が否定文になっている点が今までの例と異なり、この言い回しに慣れていないと複雑に感じられるかもしれないが、上と同様に解釈すればよい。話し手 Danny は this wasn't the happiest family on earth (バックシフトを解除すると this isn't the happiest family on earth) を驚くべきこととして提示しており (ポイント①)、娘たちの喧嘩の様子から、その驚くべきことが成り立っているように見える (聞こえる) と指摘している (ポイント②)。なお、これに対して Michelle が非常に嫌味っらしい口調で “Oh,

<sup>6</sup> この文脈は Wells (2006: 135) の言い方を借りれば the restatement of an existing polarity (既出の「である」「ではない」の再提示) の文脈であり、こういった文脈では本来弱く読まれるはずの be 動詞や (法) 助動詞に文強勢が置かれる。たとえば He promised he would finish it, and he actually *did* finish it. (ibid.) の and 以降では did に文強勢が置かれるが、これもそのパターンの実現のされ方の一つであると言える。

please” と返すが、これは、「this isn't the happiest family on earth は驚くべきことだ」と考える Danny にとって前提となっている「本当は this is the happiest family on earth のはずだ」という想定に対しての「冗談やめて」である。

最後に提示する例は TV ドラマ『スター・トレック』から採ったものである。

- (15) [状況説明] 普段は非科学的なものを全く信じずロボット的な思考や行動をする Seven が、急に「分子に見つめられているような感じがした」と非科学的な言い出したので、世話役の Janeway が次のように言う。なお、Janeway はこれまでずっと、Seven に人間らしい感情（非科学的なものたまには信じる感情）を持ってほしいと思って接してきた。

**If I didn't know you better, I'd say you just had your first spiritual experience.**

(*Star Trek: Voyager*, Season 4, Episode 21, The Omega Directive)

まるで神秘体験に目覚めちゃった人みたいなこと言うのね。

話し手の Janeway は、you just had your first spiritual experience を驚くべきこととして提示しており（ポイント①）、Seven の珍しく非科学的な発言から、その驚くべきことが成り立っているように見える（聞こえる）と指摘している（ポイント②）。

以上、実例をもとに見てきたように、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV は一貫して (7) の大意を伝達している。それでは、一体どうして If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV という形式がそのような大意を伝達することができるのだろうか。2.2 節ではそのメカニズムについて考える。

## 2.2. その大意が伝達されるメカニズム

### 2.2.1. 字義通りの意味

上で見た大意が伝達されるメカニズムを説明するにあたって、まずはミクロな発想法を採ってみたい。つまり、パーツとなる語彙項目の知識に仮定法という文法項目の知識を適用したら厳密にはどのような意味が発生することになるのかを考えることから始めたいということである（1 節の (6) はあまりに大雑把で不十分である）。これを字義通りの意味 (literal meaning) と呼ぶことにすると、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の字義通りでない意味（2.1 節の「大意」）が発生するメカニズムを知るためには、まずは字義通りの意味を正確に記述する必要があるだろう<sup>7</sup>。

はじめに注目するのは know (X) (any) better の部分である。筆者はこの部分が「SV だと思わないだけの経験的知識、常識、分別、理解を (X に関して) 持っている」という意味を担って

<sup>7</sup> 字義通りの意味 (literal meaning) という概念についての慎重な議論は Recanati (2004) を参照されたい。また、ここで言う大意とは、必須ではない（文脈によって打ち消すことが可能である）けれどもデフォルトで発生する含意のことで、語用論の術語で言えば「一般化された会話の含意 (generalized conversational implicature)」(Levinson 2000) に相当する。



いると想定する。これ全体を not で包んだ not know (X) (any) better は、「SV だと思わないだけの経験的知識、常識、分別、理解を (X に関して) 持っていない」、言い換えると「SV だと思ってしまう程度の経験的知識、常識、分別、理解しか (X に関して) 持っていない」の意であると想定する。この想定は、以下で見えていく know better than to do ... に関する事実を踏まえると、自然な想定であると思われる。

英語には、以下に例示するように、know better than to do ... 「…しないだけの経験的知識、常識、分別、理解がある、…するほど馬鹿ではない」という表現がある<sup>8</sup>。多くの辞書にイディオムとして掲載されている表現である。

- (16) [...] with only one of me on my side of the table and eleven of them clustered on the other, I **knew better than to protest**. (Brian Evenson, “Dapplegrim”)  
 [...] テーブルのこちら側には私一人しかおらず、反対側には 11 人もいる、というこの状況で反論するほど私は愚かではなかった。
- (17) Dream on, Walker says to himself. A person of your intelligence should **know better than to think that**. (Paul Auster, *Invisible*)  
 ありえない妄想はやめろ、とウォーカーは心の中で言う。お前ほどの知性を持つ人間がそんな馬鹿なことを考えちゃいけない。

本稿との関連で重要なのは、何をやるほど馬鹿ではないという話なのか文脈上自明である場合には、know better than to do ... の than 以降が省略されることが多いという事実である。たとえば以下の実例を見てみよう。

- (18) [状況説明] 魔女たちの間では、人間が「魔女はみな大きなイボのある老婆で、尖った帽子をかぶり、ほうぎに乗って移動するもの」と思い込んでいることが問題視されている。そんな中、魔女のサマンサが、夫のダーリン（普通の人間で、広告会社に勤務）が魔女のステレオタイプ通りのイラストをハロウィン用の広告に使おうとしていることを知り、次のように言う。  
 Darrin, how could you? You of all people! You should **know better!** That’s the kind of thing we’re trying to fight. (*Bewitched*, Season 1, Episode 7, The Witches Are Out)  
 ダーリン、どうしてこんなこと…。よりによってあなたが！ こんなことしたらダメだって分かっているはずでしょう！ 私たちはまさにこういうのを撲滅しようとして

<sup>8</sup> この表現に含まれている better は think better of ... 「思い直して、…するのをやめる」の better とよく似ている。

Again, my first instinct was to phone Margaret; then I thought better of it. (Julian Barnes, *The Sense of an Ending*)  
 今回も、マーガレットに電話したい衝動に駆られたが、思い直した。

know better than to do ... も think better of ... も、「しない方がよい行為をしないでおくには、その行為をしてしまう人よりも知識や思考の質が良い (better) ことが必要である」という見方を前提として成り立っている表現なのだろう。

るのよ。

ここでは、*know better than to use that kind of thing for Halloween campaigns* の意味で *know better* という表現が省略的に用いられている。このような *know better* を「省略的 *know better*」と呼ぶことにしよう。省略的 *know better* も多くの辞書でカバーされている。たとえば優れたイディオム辞典であるマケーレブ・岩垣 (2003) では、*know better (than to do)* というように省略の可能性も考慮して項目が立てられている。

省略的 *know better* が否定文内で用いられると、*know* と *better* の間に *any* が現れる—言うなれば「省略的 *know any better*」が用いられる—ことも多い。以下に実例を提示する。

- (19) You should've seen the steaks. They were these little hard, dry jobs that you could hardly even cut. You always got these very lumpy mashed potatoes on steak night, and for dessert you got Brown Betty, which nobody ate, except maybe the little kids in the lower school that didn't **know any better**—and guys like Ackley that ate everything.

(J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*)

あのステーキったらなかったよ。ちっこくて固くてカピカピな類のやつで、まあ切れやしない。晩飯がステーキのときはいつもすごいゴロゴロってした感じのマッシュポテトがついてきて、あとデザートはブラウンベティなんだけど、これがまたさあ、誰も食べないんだよね。下級生のがキたちは食べてみたいんだけど、まあそれは舌がその程度ってことで—あ、あとアクリーみたいな何でも食べる奴は食べてたね。

- (20) 'Great thing about Moselle,' he continued, raising his voice, 'it's the perfect wine to serve before a claret. A lot of people serve a Rhine wine instead, but that's because they don't **know any better**. A Rhine wine will kill a delicate claret, you know that? It's barbaric to serve a Rhine before a claret. But a Moselle—ah!—a Moselle is exactly right.' (Roald Dahl, "Taste")

「モーゼルワインの素晴らしいところは」と彼は声を張り上げて話を続けた。「クラレットワインの前に出すのに最適ということでした。ここでラインワインを出してしまう人がたくさんいますが、それはその程度の理解しか持っていないからなんですよ。ラインなんて出したら、せっかくのクラレットの繊細なお味が台無しになってしまいます、お分かりですか。クラレットの前にラインを出すなんて野蛮なわけです。それに比べてモーゼルは、ああ想像しただけでもう、モーゼルはこの上なくピッタリなんですよ」

*know any better* が指しているのは、(19) の場合、デザートブラウンベティを食べないくらいの知識、常識、分別を多少なりとも持っている状態である。(20) の場合は、クラレットワインの前にラインワインを出さないくらいの知識、常識、分別を多少なりとも持っている状態である。あえて *than* 以降を補うと、それぞれ、*know any better than to eat ...* と *know any better than to*

serve ...となるが、実は than 以降を省略しないフルの形の know any better than to do ... は普通の言い方ではない。3節で紹介・利用する SOAP コーパスを利用して {[know] any better than to [v\*]} を検索すると（この式は {know の活用形+any+better+than+to+動詞} を意味する）、たった2例しかヒットしない。また、先に触れたマケーレブ・岩垣（2003）では (not) know any better という項目が立てられており、know better (than to do) とは違って than to do が後続する可能性が実質的に排除されている。省略的 know any better はまさに省略的 know any better の形で慣習化しているのである。

know better than to do ...に関するこうした事実を踏まえると、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の know (X) (any) better の部分を know (X) (any) better than to think (that) SV の省略形として捉え、「SV だと思わないだけの経験的知識、常識、分別、理解を (X に関して) 持っている」という意味を担っていると考えるのは自然なことだと言えるだろう<sup>9</sup>。すると、not を加えた not know (X) (any) better の意味は、「SV だと思わないだけの経験的知識、常識、分別、理解を (X に関して) 持っていない」、すなわち「SV だと思ってしまう程度の経験的知識、常識、分別、理解しか (X に関して) 持っていない」くらいのものになる。

ここに1節の(1)で提示した仮定法の原理的理解を被せる。すると、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の字義通りの意味（(6)の精緻化版）は以下のように記述することができる。

(21) If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の字義通りの意味

「もしも私が、SV だと思ってしまう程度の経験的知識、常識、分別、理解しか (X に関して) 持っていなかったら、SV と思う [言う, etc.] ところだ (実際の私は SV ではないと判断できるだけの経験的知識、常識、分別、理解を (X に関して) 持っているので、SV とは思わない [言わない, etc.] が)」

これを2.1節で見てきた例に具体的に当てはめてみると、それぞれの例の該当箇所(以下のa)はbのように理解できる。まずは If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の X スロットが you で埋まっている例を見てみよう。

(22) a. If I didn't know you any better, I would say that you'd developed a little crush

b. もしも私が、「Kevin は取材対象の女性に恋をしたのだ」と思ってしまう程度の経験的知識・理解しか (Kevin に関して) 持っていなかったら、「Kevin, あなた, 取材対象に恋をしたのね」と言ってしまうところよ (実際の私はあなたが取材対象の女性に恋をするような人ではないと判断できるだけの経験的知識・理解をあなたに関して持つ

<sup>9</sup> 言い換えると、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, swear, etc.] (that) SV は know better than to do ..., 省略的 know better, 省略的 know any better に英語らしさを与えられているということである。認知言語学の術語を用いて捉え直すならば、前者は後者に「動機づけられている (motivated)」、「生態的地位 (ecological niche) を与えられている」ということである (平沢 2019a : 28-31, 53-55, 229-235 ; Taylor 2004 ; Taylor 2015a)。

ているから、そんなことは言わないけど)。

- (23) a. if I didn't know you better, I'd swear you didn't want me going out with your sister  
b. もしも僕が、「Danny は妹と僕が付き合うのを嫌がるような人だ」と思ってしまう程度の知識・理解しか (Danny に関して) 持っていなかったら、「Danny は妹と僕が付き合うのが嫌なんだろ」って言うところだよ (実際の僕は、Danny がそういうことを嫌がるような人じゃないって判断できるくらいに Danny のことをよく知っているから、そんなこと言わないけどさあ)。
- (24) a. If I didn't know you better, I'd say you just had your first spiritual experience  
b. もしも私が、「Seven は神秘体験に目覚めたんだ」と思ってしまう程度の知識・理解しか (Seven に関して) 持っていなかったら、「Seven, あなたは神秘体験に目覚めたのよ」と言うところよ (実際の私は、Seven が神秘体験なんてするような人じゃないって判断できるくらいに Seven のことをよく知っているから、そんなこと言わないけどね)。

さらに、(25) のように X スロットが空の場合であっても、そこに you があるかのように読むのが自然であることが多い (3 節も参照)。

- (25) a. If I didn't know any better, I'd say you're one of those stubborn people who are not open to suggestions  
b. もしも僕が、「シーベルト学長は他人の意見を受け付けない頑固オヤジだ」と思ってしまう程度の知識・理解しか (シーベルト学長に関して) 持っていなかったら、「シーベルト学長, あなたは他人の意見を受け付けない頑固オヤジだ」と言うところですよ (実際の僕はシーベルト学長が他人の意見を受け付けない頑固オヤジではないと判断できるくらいにシーベルト学長のことをよく知っているの、そんなことは言いませんが)。

以下の (26) では、隠れた X を this family で埋めて読むのが適切であるが、this family には聞き手 (喧嘩をしている娘たち) が中心的な構成員として含まれているので、(25) とそう遠くない例であると言える。

- (26) a. if I didn't know any better, I'd say this wasn't the happiest family on earth  
b. もしも僕が、「この家族は地球で一番幸せな家族というわけではない」と思ってしまう程度の知識・理解しか (この家族に関して) 持っていなかったら、「この家族は地球で一番幸せな家族というわけではない」と言うところだよ (実際の僕は、この家族は地球で一番幸せな家族だと判断できるくらいにこの家族のことをよく知っているの、そんなことは言わないけどね)。

ただし、隠れた X を this family で埋めて読むのが適切であるとは言っても、実際に補って if I didn't know this family any better と発話するのは普通でないことに注意されたい。X を補って発話するのが完全に自然になるのは X が you である場合のみである (3.1 節も参照)。

隠れた X スロットを埋めて読むのに適切なのが you 以外の名詞句 (でありかつ上の this family とは違って聞き手を指示対象に含まない名詞句) である場合もある。たとえば以下の (27) に部分的に再掲した『美女と野獣』の例では、X スロットを埋める名詞をあえて (やや不自然ではあるが) 明示すると If I didn't know our cultural norms better, I'd say she even cared for him であって、If I didn't know you better, I'd say she even cared for him ではない。

- (27) a. If I didn't know better, I'd say she even cared for him  
 b. もしも俺が、この社会の「普通」に関して、「Belle は野獣のことが好きなんだ」と思ってしまう程度の知識しか持っていなかったら、「Belle は野獣のことが好きなんだ」と言ってしまうところだぜ (実際の俺はこの社会の「普通」に関してもっと知識を持っているから、そんなこと言わないけどな)

さらに、X スロットを埋めて読むのに適切な名詞句が何なのかを特定することができない場合もある。たとえば以下に部分的に再掲したパンの例では、if I didn't know you better, I'd think this was last night's ... と読むことも if I didn't know our cultural norms better, I'd think this was last night's ... と読むことも可能である。解釈の違いについては以下の b と c を参照されたい。

- (28) a. if I didn't know better, I'd think this was last night's ...  
 b. もしも僕が君 Samantha に関して「これは昨日の夕食に出そうとしていたものだ」と思ってしまう程度の経験的知識しか持っていなかったら、「これは昨日の夕食に出そうとしていたものだ」と思ってしまうところだ (実際の僕は君 Samantha についての経験的知識をもっと持っているから、そんなこと思わないけどね)  
 c. もしも僕が、この社会の「普通」に関して、「これは昨日の夕食に出そうとしていたものだ」と思ってしまう程度の知識しか持っていなかったら、「これは昨日の夕食に出そうとしていたものだ」と思ってしまうところだ (実際の僕は、この社会の「普通」に関しての経験的知識をもっと持っているから、そんなこと思わないけどね)

これと同様のことが、以下に部分的に再掲した baby shower の例に関しても言える。補い方として if I didn't know you better, I'd say this was a baby shower と if I didn't know {the situation / what's going on} better, I'd say this was a baby shower という少なくとも 2 つの方法がありえ、解釈は次の b と c のように異なることになる。

- (29) a. if I didn't know better, I'd say this was a baby shower  
b. もしも俺がお前 Becky に関して「これは baby shower だ」と思ってしまう程度の経験的知識しか持っていなかったら、「これは baby shower だ」と言ってしまうところだ(実際の俺はお前 Becky に関する経験的知識をもっと持っているからそんなこと言わないけど)  
c. もしも俺が、今ここで行われていることに関して、「これは baby shower だ」と思ってしまう程度の知識しか持っていなかったら、「これは baby shower だ」と言ってしまうところだ(実際の俺は今ここで行われていることに関する経験的知識をもっと持っているからそんなこと言わないけど)

なお、繰り返しになるが、X を補って発話するのが完全に自然になるのは X が you である場合のみであることに注意されたい (3.1 節も参照)。ここで述べているのは know の目的語をあえて補うとすればどうなるかである。

さて、ここまでは (21) に示した字義通りの意味 (とその具体例ごとの具現化) を見てきたわけだが、この字義通りの意味から 2.1 節の (7) で示した大意が生じるメカニズムはどのようなものだろうか。

### 2.2.2. 戦略的仮定法

2.1 節の (7) で示した大意が生じるメカニズムを考えるにあたって注意したい点は、発話時の話し手は (大意 (7) にある通り) 実際には SV と思っているのに、(21) においては、SV と思っている可能性のある主体の候補から話し手が排除されているという点である。このような思考主体候補からの自己排除は、様々な言語で会話におけるある種の戦略として利用されうる。

たとえば日本語では、母親が大学生の娘のファッションに口出しする発話として、(30) のようなものがありえる。

- (30) ねえ、A 子、その格好、お母さんはとっても素敵だなんて思うんだけど、お母さん以外の人が見たら、「中学生みたいな格好してる」って思っちゃうわよ。 (作例)

もちろんこのセンテンスは娘の格好を中学生の格好のようだと思っていない母親も発話しうるが、実は娘の格好を中学生の格好のようだと思っている母親もまた発話しうるものである。後者の場合、「その格好、お母さんはとっても素敵だなんて思うんだけど」と「お母さん以外の人が見たら」の部分は戦略的に選択された言葉遣いである。効果としては、娘の怒りの矛先を自分からそらすという面もあるが、それだけではない。「中学生みたいな格好してる」という思考の主体の候補から自分 (母親) を排除し、その候補を他者一般に広げることによって、この思考は話し手 (母親) の個人的な何かによって発生したものではなく、聞き手 (娘) の格好その

ものにそう思わせるところがあるのだという風に、当該思考の原因を聞き手の格好に帰属させることができるのである。英語の If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV にも、これと類似したストラテジーが働いていると思われる。

仮定法を用いて、「実際の知識状態の私は SV なんて思っていないけど」と暗に示しつつ「仮定の知識状態の私は SV と思いうる」という言い方をすることにより、SV と思いうる可能性が現実世界の私（話し手）以外の人一般に開かれているように見せかけることができる。If I didn't know (any) better で示される仮定の知識状態の自分は現実の自分よりも知識量が低いからである。たとえば (10) の花嫁付添人の例で言えば、現実の知識量の話し手と一緒に働いてきたことにより聞き手 Kevin のことをよく知っているが、仮定の知識量の話し手はそこまで Kevin のことを知らない。これにより、仮定の知識量の話し手は世間一般の人間に近づくことになる。世間一般の人間は Kevin と一緒に働いて Kevin がどんな人なのかを知る経験などしていないからである。こうして話し手 Maureen は、「Kevin は取材対象に恋でもしているのではないか」と思いうる可能性が世間一般の人に開かれているように見せることができる<sup>10</sup>。

SV と思いうる可能性が人一般に開かれているように見せるということは、すなわち、当該の思考が話し手個人の気分や解釈の癖などによって発生したのではなく、そう思わせる何か外界の側にあるように見せる、ということである。たとえば花嫁付添人の例 (10) で言えば、話し手 Maureen は、仮定法を用いて「実際の知識状態の私は、あなた Kevin が取材対象に恋をしているとは思っていない」と暗に示しつつ「仮定の知識状態の私は、あなた Kevin が取材対象に恋をしていると思いうる」という言い方をすることにより、Kevin が取材対象に恋をしていると思いうる可能性が話し手 Maureen 以外の人一般に開けているように見せることができる。これはつまり、Kevin が取材対象に恋をしているのではないかという思考の原因が、Maureen の個人的な解釈の癖などではなく、外界の何か—ここでは Kevin が直前にした “She's more than just this perpetual bridesmaid. You know, I don't know, there's ... there's ... there's a lot more to her than that” という発話—にあるように見せることができるということである。要約すれば、Maureen は Kevin が言ったことの客観的なおかしさを強調するための戦略として仮定法を利用したのだと言える。他の例に関しても同様に、SV なのではないかという思考の見せかけの原因帰属先を外界のモノに求めることができる。(8) のパンの例ではパンの見た目、(9) の投書箱設置の例ではシーベルト学長の “stop installing suggestion boxes everywhere” という発言、(11) の『美女と野獣』の例では Belle の “Don't be afraid. He's gentle and kind.” という発言、(13) の baby shower の例では部屋の見え具合…といった具合である<sup>11</sup>。

このように、SV であると思っている主体の候補から自分（話し手）を排除して見せることは、その思考の原因を外界のモノに帰属させて主張の説得力を高めるためのストラテジーとして機能する。このことが 2.1 節の大意 (7) のポイント①②に関わっているものと思われる。

<sup>10</sup> この点では Anyone would think ... と言っているのに近い (Ash Spreadbury 氏の指摘による)。

<sup>11</sup> この段落で述べたことは脚注 10 で言及した Anyone would think ... に関しても言える。たとえば, “Anyone would think you hated me.” 「誰がどう見たってお前は俺を嫌ってる」は、聞き手は話し手を嫌っているのだらうという思考を引き起こすような言動が聞き手の側に見られるということを示す文である。

まず、このストラテジーを利用したいと思う人は、基本的には、聞き手に対して SV であると言いたい人であろう (ポイント②)。聞き手に対して SV であると言いたいのでなかったら、SV であるという主張に客観性と説得力を持たせたい (そのためにストラテジーに頼りたい) とはそもそも思わないはずである。たとえば花嫁付添人の例に即して言えば、話し手 Maureen は聞き手 Kevin が取材対象に恋をしていると思っており、それを聞き手 Kevin に対して言いたいからこそ、説得力を高めたいと思い、戦略的な喋り方に頼るわけである。

そして、人が SV だという自らの思考・主張に説得力を持たせたいときというのは、主に、その SV に驚くべきところがある場合であろう (ポイント①)。ごく当たり前のことを言うだけならば、聞き手にすぐさま受け入れられることが予想されるため、説得力を高めるためのストラテジーに頼ろうとはしない。たとえば花嫁付添人の例に即して言えば、Kevin が取材対象に恋をしていることが驚くべきことだからこそ、Maureen はその主張の説得力を高める必要を認識し、戦略的な喋り方に頼るのである。

以上の議論を踏まえると、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の意味を知っていると言えるためには、次のことを知っていなければいけないということになる。

(31) If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の意味

字義通りには、「もしも私が、SV だと思ってしまう程度の経験的知識、常識、分別、理解しか (X に関して) 持っていなかったら、SV と思う [言う, etc.] ところだ (実際の私は SV ではないと判断できるだけの経験的知識、常識、分別、理解を (X に関して) 持っているので、SV とは思わない [言わない, etc.] が)」という意味を表す。しかし、話し手がこの表現を利用するのは、SV という驚くべき事柄が成り立っているとする自らの思考・主張に表面上の客観性と説得力をもたせるためのストラテジーとしてであり、本当に伝達したい意味は「SV という驚くべきことが成り立っているように見える (聞こえる)、まるで SV みたいじゃないか」である<sup>12</sup>。

2.3. 字義通りの意味は母語話者の意識に立ち上っているか？

意味分析の最後に、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の使用の現場において (伝達される大意に加えて) 字義通りの意味は話し手と聞き手の意識に立ち上るのかという問題について議論したい<sup>13</sup>。おそらく立ち上るだろうというのが筆者の考えである。

その根拠となるのが、(32) に示したように、話し手の用い (ようとし) た If I didn't know (X)

<sup>12</sup> 2.1 節と 2.2 節で見た戦略は一般的な言語学の術語を使って言えば「語用論」的な戦略であるということになる。実際、本稿も要旨では慣例にならって「語用論」という術語を用いているが、筆者は語用論と意味論を峻別することが有意義だと考えているわけではない (Haiman 1980; Langacker 2008: 39-43)。

<sup>13</sup> この問題はいわゆる分析可能性 (analyzability) の問題として読み替えることもできる (Bybee 2010: 45-48; Bybee 2015: 205-206; Langacker 1987: 292-298, 448-466; Langacker 2008: 61; Langacker 2019: 351)。具体的には、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, swear, etc.] (that) SV の if 節と主節の切れ目、および if 節という部分がこの表現全体に対してなしている貢献は、どの程度英語母語話者に認識されているのかという問題として読み替えられる。筆者は、2.3 節の議論から明らかであるように、if 節と主節の切れ目と if 節の貢献は英語母語話者に相当程度認識されているはずだと考えている。



(any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の全体に対してではなく if 節部分に対して聞き手がリアクションをするケースが散見されるという事実である。(32) では If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV を太字で、if 節への聞き手の反応を下線で強調している。なお、この例の該当箇所を自然な日本語に翻訳するには非常に大きな意識が必要となり、そのような翻訳をはじめに提示すると議論が不明瞭になる危険性があるので、ここではいったん説明的な訳を示しておく（意識については後の脚注 14 で議論する）。

(32) [状況説明] Tony は兵器製造会社の CEO だったが、正義のヒーロー「アイアンマン」になったせいで死期が近付いているためか、CEO の座を秘書の Potts に譲ったり、アートコレクションをアメリカボーイスカウト連盟に寄付したりした。そんな中、いくつか持っているアイアンマン変身スーツのうちの 1 つを親友の Rhodey に盗まれてしまった。以下は Tony のことを監視していた Fury にこの件について問い詰められている場面である。

Fury: You've been very busy. You made your girl your CEO. You're giving away all your stuff. You let your friend fly away with your suit. Now, **if I didn't know better ...**

Tony: You *don't* know better. I didn't give it to him. He took it.

Fury: Whoa, whoa, whoa. He took it? You're Iron Man and he just took it? The little brother walked in there, kicked your ass and took your suit. Is that possible? (映画 *Iron Man 2*)

フューリー： お前さん、こここのところ本当色々あったな。秘書を CEO に就任させたり、山ほどの寄付をしたり。あと、親友がお前のアイアンマン・スーツを着てどこかに飛んで行ったんだってな。 **仮想の知識状態の俺なら…**

トニー： 現実の知識状態のお前だって同じこと思ってたら。俺はスーツをあげてなんかない。奪われたんだ。

フューリー： おととつと。奪われた？ アイアンマンのお前が、スーツを奪われただけ？ やってきた弟分にあっけなくやられて、スーツを奪われただけ？ そんなことあるか？

Fury が if I didn't know better の続きを最後まで言っていたら、おそらく次のような発話になっていたろう。

(33) [...] if I didn't know better, I'd say (that) you gave it to him.

さらにこれの better と対応する than 以降を補うと、次のようになる。

- (34) [...] if I didn't know better than to think you gave it to him, I'd say (that) you gave it to him.

この英文により伝達される大意は、

- (35) 「お前はアイアンマン・スーツを Rhodey にあげてしまったのだという驚くべきことが成り立っているように見える、まるでアイアンマン・スーツを Rhodey にあげてしまったみたいじゃないか」

だが、字義通りの意味は、

- (36) 「もしも俺が、お前はアイアンマン・スーツを Rhodey にあげてしまったのだと思ってしまう程度の経験的知識、常識、分別、理解しか持っていなかったら、お前はアイアンマン・スーツを Rhodey にあげてしまったのだと言うところだ（実際の俺はお前がアイアンマン・スーツを Rhodey にあげたのではないと判断できるだけの経験的知識、常識、分別、理解を持っているから、そうは言わないが）」

である。2.3 節の冒頭で提起した「字義通りの意味は話し手と聞き手の意識に立ち上るのか」という問題は、この特定の例に当てはめると、「(36) は Fury と Tony の意識に立ち上るのか」という問題である。この問題に答えるにあたって、Tony の *You don't know better.* という返答が大きなヒントを与えてくれる。この返答内の *don't* は仮定法ではなく直説法をとっているから、Tony は Fury の *didn't* という仮定法に直説応答しているというよりも、この仮定法の背後にある *I know better* の部分—「実際の俺はお前がアイアンマン・スーツを Rhodey にあげたのではないと判断できるだけの経験的知識、常識、分別、理解を持っている」という部分—に対して応答しているのである。したがって、ここで Tony が言いたいことは「実際の Fury だって、俺がアイアンマン・スーツを Rhodey にあげたのではないと判断できるだけの経験的知識、常識、分別、理解を持っていない」、要するに「実際の Fury だって、俺がアイアンマン・スーツを Rhodey にあげたんだと思ってるんだろう」ということである。このような Tony の応答は、*If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV* の *if* 節部分がどのような役割を果たしているかを認識していないかぎり（つまり伝達される大意を認識しているだけでは）不可能だろう<sup>14, 15</sup>。

<sup>14</sup> 筆者が記録しているのは全て TV ドラマや映画などフィクションの例なので、「普通は *if* 節の役目など認識されていないのではないか」という反論をしたくなる向きもあるかもしれない。しかし、たとえば (32) の *You don't know better* という返答は「つまらない」に対する「いや、つまるよ」という返答—「つまらない」の *tsumaru* 部分に役目を見出した返答—ほどのおかしさを伴わないものである（萩澤大輝氏の指摘による）。したがって、フィクションであるから本来は見出されない *if* 節の役目が見出されているのだというような批判はあたらないだろう。

<sup>15</sup> 以上の理解を踏まえ、例 (32) の自然な翻訳として以下のものを提案する。

Fury: You let your friend fly away with your suit. Now, **if I didn't know better** ...

ところで、(32) の例が教えてくれることがもう一つある。それは If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV がおそらくほぼ完全に慣習化しているであろうということである。Tony は、Fury の if I didn't know better まで聞いた時点で、Fury が If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV を使おうとしていることを察知して（加えて SV の部分に you gave it to him が来そうであることを文脈から推測して）返答している。そして Fury がその Tony の読解に対して誤解だと反論していないことから考えて、この Tony の読みは正しいようである。つまり If I didn't know better が If I didn't know better, I'd think [say, swear, etc.] (that) SV へのキュー (cue) になっているのである。これは If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV が高度に慣習化していなければ起こらないことである。たとえば日本語で「それを言っちゃ」と聞いたら「おしまいだ」が続きそうだと判断できるのは、「それを言っちゃおしまいだ」が慣習化しているからであり、「明日、職場では」の後に「老舗洋食屋のオムライスセットが無料で配られるらしい」が続くことを予測しろと言われても無理な話である。なお、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の慣習化については 3 節でも触れる。

### 3. 頻度分布とバリエーション

3 節では、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の主に形式面のバリエーションを頻度分布の観点から記述する。具体的には、コーパスを用いて、(i) X スロットを埋める名詞 (句) の有無の相対頻度、(ii) any の有無の相対頻度、(iii) I'd に続く動詞の頻度分布、(iv) SV の主語スロットを埋める名詞 (句) の頻度を調べる。さらに、コーパス調査の結果に基づいて、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の中心的なタイプはどのようなもので、そこから外れるタイプは中心的なタイプとどのように関連付けられるかを論じる。

本稿で使用するコーパスは *The Corpus of American Soap Operas* (以下 SOAP) である (Davies 2011-)。これは 1990 年代から 2000 年代のアメリカの TV ドラマのトランスクリプトからなる 1 億語規模のコーパスである。本研究で SOAP を利用するのは、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV がもつぱら日常会話で用いられる表現であり、かつ、筆者にとって利用可能なコーパスの中で日常会話の実態を反映している度合いが最も高いコーパスが SOAP だからである<sup>16</sup>。

---

Tony:	<u>You don't know better.</u> I didn't give it to him. He took it.	(映画 <i>Iron Man 2</i> )
フューリー:	あと、親友がお前のアイアンマン・スーツを着てどこかに飛んで行ったんだってな。 <b>世間様が聞いたらきっと…</b>	
トニー:	<u>お前だって世間様とやらと同じこと思ってたろ。</u> 俺はスーツをあげてなんか無い。奪われたんだ。	

英語の方は、現実の知識状態の自分とは異なる仮定の知識状態の自分を持ち出すことによって思考の原因を外界（ここでは Tony の言動）に帰属させるというストラテジー (2.2.2 節参照) をとっているが、日本語では、例 (32) の訳の部分で示したような、これと直接的に対応する言い方はまずしない。そのかわりに、日本語では、「世間様」や「他の人」など他者を持ち出す（母親が娘の格好に口出しする例 (30) も参照）ことによって思考の原因を外界に帰属させるというストラテジーならば容認される。この発想を利用したのが上で提案した翻訳である。

<sup>16</sup> 現代英語に関する最近のコーパス研究では Davies (2008-) *The Corpus of Contemporary American English* (COCA) が利用されることが多いが、2020 年 3 月のアップデート以前の COCA は、話し言葉に関するセクショ

筆者が行った SOAP 検索の方法は以下の通り。まず、コロケーション検索の機能を選択し、検索式として {if [pp\*] [do] [xx\*] know} を入力し（この式は {if+人称代名詞+do の活用形+否定辞+know} を意味する）、これの右 7 語以内に better が現れる例を検索した。これによって得られた 384 例から、以下の条件を満たすものを手作業で抽出した。

- (37) a. if 節の主語が I である。  
 b. if 節の助動詞が did である (did not または didn't)。  
 c. if 節を従属節と呼ぶとして、その従属節と対応する主節が従属節に後続する。  
 d. その主節の主語は I で、述部が助動詞の would (または縮約形の 'd) から始まる。  
 e. would (または縮約形の 'd) と結びつく動詞が that 節を目的語にとっている (ただし that は表示されていてもされていなくてもよい)。

この条件を満たす例—if I {didn't / did not} know ... better ... {I'd / I would} VERB (that) ... という形式をとる例—is 384 例のうち 323 例であった (以下、「主要パターン」)<sup>17</sup>。323 というこの数値は If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV が高度に慣習化した表現であることを示していると言ってよいだろう。以下の 3.1 節から 3.4 節ではこの 323 例の頻度分布について見ていく。除外された 61 例にどのようなものがあつたかについては 3.5 節で触れる。なお、本稿の検索はすべて 2020 年 1 月 18 日に行ったものである。

### 3.1. X スロットの頻度分布

X スロットを埋める名詞 (句) の頻度分布は以下の通り。ただし、名詞 (句) だけを並べると表だけを見たときに意味が汲み取りにくくなると思われるため、if 節全体を表示してある。

表 1. X スロットに注目した if 節の頻度分布

if 節	件数
<i>if I {didn't / did not} know <math>\phi</math> (any) better</i>	293
<i>if I {didn't / did not} know <b>you</b> (any) better</i>	28
<i>if I {didn't / did not} know <b>it</b> (any) better</i>	2
合計	323

このデータは、当該の言い回しにとって X スロットは空であるのがデフォルトの状態であるこ

ンを設けているものの、専門家へのインタビューなど日常会話とは性質の異なる会話占める割合が大きく、日常会話でよく用いられている表現がそこまで多くヒットしないという問題があつた (平沢 2019b)。本稿のコーパス調査は 2020 年 1 月 18 日に行ったものであり、まだこの問題を解決するアップデートがなされる前であつたため、COCA ではなく SOAP を利用することにした。脚注 17 も参照。

<sup>17</sup> 検索当時、COCA は総収録語数で言えば SOAP の 5 倍以上であるにもかかわらず、同じ検索方法で得られる if I {didn't / did not} know ... better ... {I'd / I would} VERB (that) ... の事例の数は約 30 分の 1 (10 例程度) であつた。

とをはっきりと示している。1位の $\phi$ が2位のyouに圧勝している。ただし、2.2.1節で述べたように、Xスロットが空の場合であっても、そこにyouがあるかのように解釈するのが自然であることが多いため、表1の1位の $\phi$ について「隠れたyouがある場合が多い」と考えることもできるし、2位のyouについて「 $\phi$ でもよいはずのところでの余剰的にyouと言ってしまったもの」と考えることもできる。したがって、確かに形式面では1位の $\phi$ が2位のyouに比べて圧勝するものの、意味の面では1位と2位の差について議論することは有意義でないだろう。

### 3.2. anyの有無の相対頻度

次はif節内のanyの有無という観点から頻度分布を見てみよう。ここでもif節全体を表示してある。

表 2. anyの有無の相対頻度

if 節	件数
<i>if I {didn't / did not} know (X) <math>\phi</math> better</i>	201
<i>if I {didn't / did not} know (X) <b>any</b> better</i>	122
合計	323

表2は、表1とは違って、特別大きな頻度の偏りを示してはいない。anyを表示しない方がやや高頻度であるが、いずれの形式もこの言い回しの現れ方としていたって普通であると言えるだろう<sup>18</sup>。

### 3.3. I'd または I would に続く動詞の頻度分布

今度は主節の側に目を移そう。まず、I'd または I would の後の動詞の頻度分布を表3にまとめる。ここでは主節の主語から動詞までを表示している。

<sup>18</sup> このanyはbetterという比較級の直前の位置に存在する「差分スロット」(どれくらいの差がついているのかを表示するための箱のようなもの)を埋めていると考えられる(e.g. many more books「はるかにたくさんの本」, much more milk「はるかにたくさん牛乳」, a whale is no more a fish than a horse is「クジラが魚であるレベルなんて、馬が魚であるレベルとなんら変わらないよ」, John is a head taller than his brother「ジョンは弟よりも頭一つ分背が高い」)。差分スロットについての詳細は平沢(2014)を参照されたい。

表 3. I'd または I would に続く動詞の頻度分布

主節の主語から動詞まで	件数
{I'd / I would} <b>think</b>	160
{I'd / I would} <b>say</b>	130
{I'd / I would} <b>swear</b>	30
{I'd / I would} <b>guess</b>	1
{I'd / I would} <b>believe</b>	1
{I'd / I would} <b>figure</b>	1
合計	323

表3は、この言い回しの主節の動詞に著しい頻度分布が存在することを示している。I'd [I would] think ... と I'd [I would] say ... だけで実例の大半がカバーされることが分かる。

#### 3.4. SVの主語スロットを埋める名詞(句)の頻度分布

次は (that) 節内の主語、つまり SV の主語スロットを埋める名詞(句)の頻度分布を見てみよう。表4の PROPER NOUN は人間の名前を指す固有名詞 (Kay など), *the*-NP や *your*-NP などは *the* や *your* から始まる名詞句 (the big guy upstairs や your wife など) を表すものとする。

表 4. SV の主語スロットを埋める名詞句の頻度分布

SV の主語スロットを埋める名詞句	件数
<i>you</i>	222
PROPER NOUN	15
<i>he</i>	9
<i>that</i>	8
<i>this</i>	8
<i>I</i>	7
<i>it</i>	7
<i>the-NP</i>	6
<i>you two</i>	6
<i>that-NP</i>	5
<i>she</i>	5
<i>this-NP</i>	4
<i>somebody/someone</i>	3
<i>your-NP</i>	3
<i>someone up there</i>	2
<i>there</i>	2
<i>they</i>	2
<i>we</i>	2
<i>Dad</i>	1
<i>half my patients today</i>	1
<i>my very dear friend</i>	1
<i>nothing</i>	1
<i>something or someone</i>	1
<i>these</i>	1
<i>you guys</i>	1
合計	323

表 4 は著しい頻度の偏りを示している。SV の主語はたいてい *you* なのである。

これは、話し手が聞き手に対して指摘しようとしている事柄が聞き手についての事柄だということを示している。このことと、2.2.1 節で述べたように *if I didn't know X (any) better* の X スロットが空であったとしても X に *you* を補って読んでも実質的に変わらないケースが多いことは、ともに、この構文が典型的には聞き手について何かを指摘・主張しようとするものであるということの現れだと考えられる。

さらに、この頻度の偏りは、2.2.2 節で言及したストラテジーの必要性とも関連していると思

われる。というのも、話し手が自分がこれからする指摘に（表面的な）客観性と説得力を持たせる必要があると感じる度合いは、聞き手以外の人間に関して何か驚くべきことが成り立っていると指摘したい場合よりも、聞き手に関して何か驚くべきことが成り立っていると指摘したい場合の方が大きいと思われるからである。

3.1 節から 3.4 節で明らかになったのは、本稿の「主要パターン」はいわゆるプロトタイプカテゴリー（prototype category）をなしているということである<sup>19</sup>。つまり、いくつかの高頻度の事例を中心的・典型的なメンバーとして、それと密接に関連した（相対的に）低頻度の事例が周辺的なメンバーとしてこのパターンに属しているということである。簡略化して以下のように図示できる。

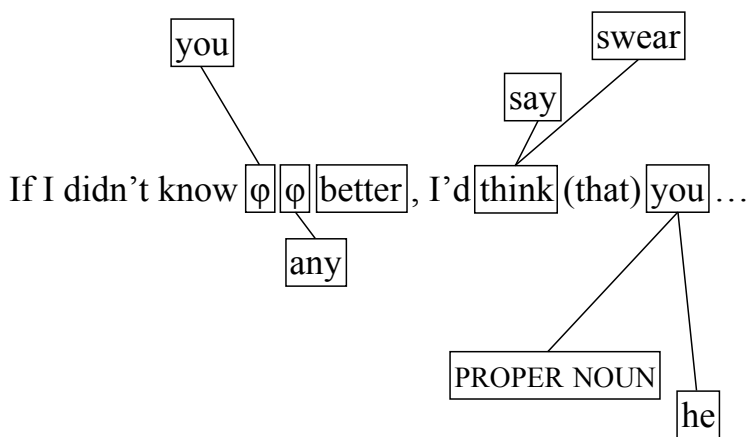


図 1. 「主要パターン」がなすプロトタイプカテゴリー

### 3.5. 残りの 61 例はすべてただの「ノイズ」か

3 節の冒頭で述べたように、主な考察対象としたのは、{if [pp\*] [do] [xx\*] know} の検索結果 384 例のうち if I {didn't / did not} know ... better ... {I'd / I would} VERB (that) ... という形式に合致する 323 例（「主要パターン」）であり、61 例は考察の対象から除外している。この除外された例の中には、主要パターンの例と重複するものやトランスクリプションの間違いによるものなど、いわゆる「ノイズ」として切り捨てるべき例も含まれているが、主要パターンと密接に関連していると考えられる例も含まれている。

後者の例のパターンのいくつかを以下に箇条書きで示す。斜体の英文はすべて SOAP で検出された例である。

- *If I didn't know any better, I might think that you were trying to ...* というように、主要パターンの would ['d] が might に置き換わったもの（4 例）。
- *if I didn't know better, I think you get ...* というように、法助動詞が用いられていない例（2 例）。

<sup>19</sup> 「プロトタイプ」および「プロトタイプカテゴリー」については西村（2015）、大堀（2002: 46-50）、Taylor（2003: 41-84）、Taylor（2015b）も参照されたい。



- *If I didn't know better, it looks like you are ...* や *if I didn't know better, it sounds like you're trying to ...*, *If I didn't know better, it'd look like you were about to say ...* というように、主節の主語が思考・認識の主体を指す代名詞ではなく非人称の it である例 (8 例)。

こうした例は、相対的な頻度の低さから考えても、主要パターンの変種 (minor variant) または主要パターンからの拡張 (extension) と考えるのが妥当だろう。言い換えると、主要パターンと変種を加えたもの全体がプロトタイプカテゴリーをなしているということである。これを簡略的に図示すると以下のようなになる。

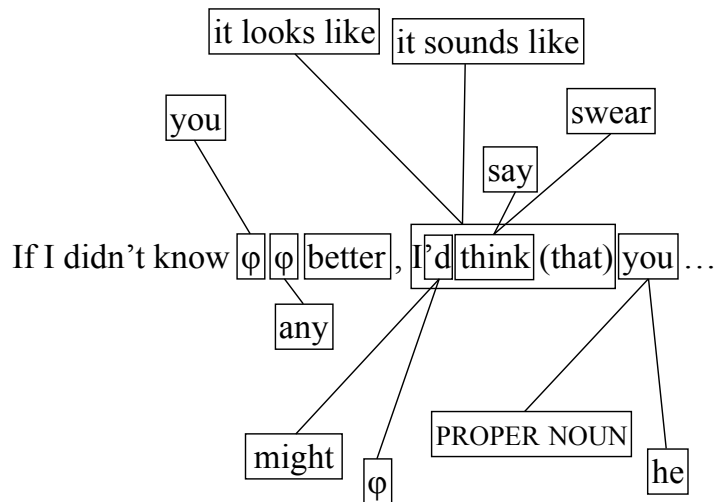


図2. 「主要パターン」とその変種がなすプロトタイプカテゴリー

#### 4. 結語

本稿の主張は、以下の4点にまとめられる。

- If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV の字義通りの意味は「もしも私が、SV だと思ってしまう程度の経験的知識、常識、分別、理解しか (X に関して) 持っていなかったら、SV と思う [言う, etc.] ところだ (実際の私は SV ではないと判断できるだけの経験的知識、常識、分別、理解を (X に関して) 持っているのだから、SV とは思わない [言わない, etc.] が)」である。
- If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV を用いる話者が本当に伝達したい意味は「SV という驚くべきことが成り立っているように見える (聞こえる)、まるで SV みたいじゃないか」である。ただし字義通りの意味も同時に意識に立ち上る。
- わざわざ If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV という形式を用いるのは、SV だという思考の主体の候補として実際の知識状態の自分を除外し、その思考を人々一般が持ちうるもののように見せることによって、当該の思考の原因を外界に帰属させ、SV だという指摘・主張に (少なくとも表面上の) 客観性・説得力を持たせるためである。

- ・ X スロットは空のままであることが多い。any は表示されない頻度の方がやや高い。主節の主動詞部分は think と say に偏る。また、低頻度ながら would が might になったり、I'd think (that) が it looks [sounds] like になったりすることもある。こうした頻度分布は、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV がプロトタイプカテゴリーをなしていることを示唆する。

最後に、If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV を辞書に掲載すべきなのかどうかという問題についての筆者の意見を述べる。もしも、外国語学習者がこの表現を用いないとどうしても伝達できない意味があり、これ以外の表現を使うと言いたいことは大きくずれてしまう、ということが多いならば、この表現を使えるようになるための情報が辞書に掲載されているべきだろう。しかし、この表現の表す意味と（もちろん同じではないが）近い内容は it looks like SV, it sounds like SV などだけ言えば伝達できる。したがって、学習者がスピーキングで実際に用いることを想定した記述が絶対に必要だとまでは言えないだろう。では、この表現を聞いて理解できるようになる必要はないか。本稿で述べた通り、この表現は高度に慣習化が進んでおり、会話において高い頻度で用いられているものである。したがって、学習者が実際の会話ではもちろんのこと、TV ドラマや映画を観ているときにこの表現に出会うことは十分にありえる。このとき、知識として知っていなくても意味を理解することができるかということが問題になる。本稿の冒頭で述べた通り、この表現によって伝達される大意は仮定法という文法項目の論理から推測される文意とは基本的に肯定・否定が逆になる。この表現を知らない学習者にとっては、話し手の英語話者が SV と思っているのかいないのかのレベルで誤解しうるわけである。このような被害の大きさを考えると、辞書に If I didn't know (X) (any) better, I'd think [say, etc.] (that) SV という項目を立て（know のイディオム欄だろうか）、「まるで SV みたいじゃないか」という大意を掲載するくらいのことはあってもよいように思う<sup>20</sup>。

## 参考文献

- Bybee, Joan (2010) *Language, usage and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan (2015) *Language change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 千葉修司 (2013) 『英語の仮定法：仮定法現在を中心に』東京：開拓社。
- Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 600 million words, 1990-present*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Davies, Mark. (2011-) *Corpus of American Soap Operas: 100 million words*. Available online at <https://www.english-corpora.org/soap/>.
- Haiman, John (1980) Dictionaries and encyclopedias. *Lingua* 50: 329–357.
- 平沢慎也 (2014) 『『クジラ構文』はなぜ英語話者にとって自然に響くのか』『れにくさ』第5号

<sup>20</sup> 辞書に掲載する場合にはイントネーションの情報も必要になるだろう。筆者が TV ドラマや映画で観測している範囲内では、know に強勢を置いて（高い音程に達して）そこから better にかけて下降上昇調（fall-rise）を取るのが一番普通であるが、I や better に強勢を置く例も存在する。こうしたイントネーション面での頻度分布や文脈との関わりについては今後の検討課題とする。

- (柴田元幸教授退官記念号) 第3分冊, 199–216.
- 平沢慎也 (2019a) 『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から多使用論へ』 東京：くろしお出版.
- 平沢慎也 (2019b) 「慣用表現 “if X is any indication [guide]” について」 住吉誠・鈴木亨・西村義樹 (編) 『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』 90–107. 東京：開拓社.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar, vol. 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2019) Morphology in cognitive grammar. In: Jenny Audring and Francesca Masini (eds.) *The Oxford handbook of morphological theory*, 346–364.
- Levinson, Stephen C. (2000) *Presumptive meanings: The theory of generalized conversational implicature*. Cambridge, MA: MIT Press.
- マケーレブ, ジャン・岩垣守彦 (2003) 『英和イディオム完全対訳辞典』 東京：朝日出版社.
- 西村義樹 (2015) 「カテゴリー化」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』 34–35. 東京：三省堂.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』 東京：東京大学出版会.
- Recanati, François (2004) *Literal meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 住吉誠・鈴木亨・西村義樹 (2019) 「慣用表現・変則的表現はどう考察されてきたか」 住吉誠・鈴木亨・西村義樹 (編) 『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』 2–16. 東京：開拓社.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic categorization*. Third edition. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (2004) The ecology of constructions. In: Günter Radden and Klaus-Uwe Panther (eds.) *Studies in linguistic motivation*, 49–73. Berlin: Mouton.
- Taylor, John R. (2015a) *Much in all as: The anatomy of a strange expression*. In: Jocelyne Daems, Eline Zenner, Kris Heylen, Dirk Speelman and Hubert Cuyckens (eds.) *Change of paradigms—new paradoxes: Recontextualizing language and linguistics*, 189–204.
- Taylor, John R. (2015b) Prototype effects in grammar. In: Ewa Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.) *Handbook of cognitive linguistics*, 562–579.
- 綿貫陽・ピーターセン, マーク (2006) 『表現のための実践ロイヤル英文法』 東京：旺文社.
- Wells, J. C. (2006) *English intonation: An introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wray, Alison (2009) Identifying formulaic language: Persistent challenges and new opportunities. In: Roberta Corrigan, Edith A. Moravcsik, Hamid Ouali and Kathleen Wheatley (eds.) *Formulaic Language: Volume 1. Distribution and historical change*, 27–52. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

# *If I didn't know better* as a Conventionalized Strategic Use of the Subjunctive Mood

Shinya Hirasawa  
s-hirasawa@keio.jp

**Keywords:** subjunctive mood, literal meaning, pragmatics, conventionality, frequency distribution  
prototype category

## Abstract

This paper offers a thorough description of the meaning and usage of an English conventional construction: [*if I didn't know* (X) (any) *better*, *I'd think* [say, etc.] (that) *p*] (e.g., “*I mean, she's just ... different.*” “***If I didn't know better, I'd think you were in love.***”). Given that it is in the subjunctive mood, it would be expected to mean literally: ‘If I were not smart or sensible enough not to think *p*, I'd think [say, etc.] *p*. (But in fact, since I *am* smart or sensible enough not to think *p*, I don't think [say, etc.] *p*.)’ The meaning it actually *conveys*, however, is along the lines of ‘surprisingly, it sounds [looks, etc.] like *p*,’ which is quite the opposite in terms of whether the speaker believes *p*. It is argued that the use of the subjunctive mood in this pattern represents a pragmatic strategy: by pretending that she could think *p* depending on her state of knowledge while implying that she does not in her current one, the speaker is trying to convince the hearer that the thought *p* can potentially be entertained by anyone. This represents an attempt to attribute the cause of the thought *p* to something out there in the world, not her personal “take” on it, thereby lending (at least a semblance of) objectivity and plausibility to what she is saying. Corpus data indicate that this construction constitutes a prototype category, *if I didn't know* (any) *better*; *I'd think* [say] (that) being the central members and other members such as *if I didn't know* {*you / it*} *better*; *I'd swear* (that) and *if I didn't know better*; *it* {*looks / sounds*} *like* being around the periphery.

(ひらさわ・しんや 慶應義塾大学)